

## Portugal <ポルトガル>

PISA は鏡のようなものでした。PISA の結果が現れる度に、各国は鏡の中に自らの姿を見ることになるのです。自分をイメージの中にあつた他人と比較するとき、思ったほど背が高くないとか、やせっぽちではないとか、太っていないとか、あるいは思っていたほどきれいではないことが分ります。そこで、このイメージの中でもっと背が高く、きれいになるために、努力する必要がありました。

### TITLE: “Strong Performers and Successful Reformers in Education: Portugal”

ANTONIO FIRMINO DA COSTA、リスボン大学研究所、社会学教授：ポルトガルでは、教育が遅れていたという歴史的経緯があります。その対処には多くの年月を要しました。この遅れは 19 世紀から持ち越されたもので、ポルトガルの伝統主義者による長い独裁時代に悪化しました。

ANTONIO NOVOA、リスボン大学学長、教育学教授：20 世紀初頭に、非識字率は約 80% でした。ポルトガル人の 5 人のうち 4 人は、読み書きができなかったのです。これは、北ヨーロッパのたいていの国々では非識字がほとんどなかった時代のことでした。そう、ここに非常に大きなギャップがあつたのです。1974 年のカーネーション革命を経て初めて、教育に対する経済的、公共的、社会的、職業的投資が開始されたのです。

ISABEL ALCADA、教育相（2009 年～2011 年）：主な目標は、万人が教育を受けられるようにすることでした。すべての人に質の高い教育を保証し、学校の有効性と教師の能力を重視するためであり、教育システムのすべての段階で、生徒たちが確実に成果を得られるためでした。

JOAO DIAS DA SILVA、全国教育連合（FNE）教職員組合、事務局長：10 年前には中途退学者や落第者の割合が非常に高く、原級留置の割合が非常に高かつた。生徒の家族にも非識字の割合が非常に高かつたのです。

生徒：「カラスとキツネ」

ANTONIO FIRMINO DA COSTA：そこで、直ちにいくつかの総合的な公共政策が実施され、この教育と能力の不足に対処する努力がなされました。

テキストスライド：重要な改革の一つは、かつては個別に運営されていた学校を、集権的なリーダーシップの下で「クラスター」としてグループ化することだった。

テキストスライド：これに伴い、農村地域の多くの小規模校が閉校となり、生徒たちは規模の大きな学校へ転校した。学校の多くは新築で、良い施設を備えていた。クラスターシステムにより、教師たちはアイデアを交換し、互いの経験から何かを得て、生徒たちにより幅広い学習の機会を与えることができるのだ。

DAVID JUSTINO、教育相（2002年～2004年）：2002年には、大きな危機を経験していました。私たちは、教育予算が適切に使われていないこと、効率が悪いことに気がきました。大体においてその理由は、1995年以降、就学児童数が減少してきているのに、依然として大勢の教師を雇っていたためでした。2つ目の問題は、農村地域に、全く孤立していて、生徒がごくわずかしかない小規模校が非常にたくさんあったことです。そこで、この時点で、予算利用の合理化プロセスを開始しました。

NUNO CRATO、教育相（2011年6月より）：非常に小規模な学校で生徒数がごくわずかな教室に生徒が5人、10人しかいない、こうした学校では、他人との接触がなく、多様な経験をすることがなく、他の宗教、他の人生経験、他の社会環境に触れることがないために、生徒たちは成長できません。学校に10人、20人というのは、とにかく少なすぎるのです。

ANTONIO NOVOA：そこでこうした学校を閉校して、図書館のある学校、実験室のある学校、研究室のある学校、資格を持った教師のいる学校へ統合できるようにする必要があります。この農村文化、基本的な文化だけでない学校の普及です。これは過去20～30年間で最高の改革、最大の変革だと思います。

教師：「これは人類にとって革命の時代でした。プトレマイオスは紀元後まもなく誕生しました。彼は何を発見しましたか？」

MARIA DE LURDES RODRIGUES、教育相（2005年～2009年）：これまでに3,200を超える学校が閉校となり、約500の教育センターが建設され、多くの改善によって変化をもたらされた学校もあります。こうした例は国中にたくさん見られます。個人的には、これは逆行できないプロセスだと思います。

テキストスライド：当初、学校の統合は広く抗議運動を引き起こした。保護者は、子どもたちが新しい学校へ通うために時間がかかりすぎることを心配した。

テキストスライド：一部の教師は、これを改悪と感じて抗議した。しかし、スクールクラスターは、生徒たちに利点をもたらしたため、次第に受け入れられていった。

教師：「では、あなたはどのようにでしょう、あなたの指紋は？それでは虫眼鏡を取ってください。指紋で分らなければ、指を観察してみましょう。」

**MANUEL ESPERANCA**、学校評議会会長：生徒数が非常に少ない学校や、施設や他の学校とのつながりがほとんど、若しくは全くない学校を閉校すべきだという点には同感です。遊び場や、体育館や、図書館がないような学校のことです。そんな学校を閉校にするアイデアは、100%賛成します。しかし、作り上げるこうしたクラスターの規模については、極めて慎重になる必要があります。

**JOAO DIAS DA SILVA**：多くの場合、改革は下から始めるのではなく、上から下へ向かって実施します。心配な点は、対処可能だと考えてはいますが、子どもたちが通学に要する時間です。これはできる限り短くするべきです。

**CARLOS PINTO FERREIRA**、省内教育・統計・計画局、教育長官：同時に、不便のある場所から子どもたちを連れ出し、環境に良い刺激のある学校へ連れて行かなければなりません。子どもたちがもっと社会的になれる場所、もっと良い結果を出せて、潜在能力を十分に発達させることができる場所です。

**DAVID JUSTINO**：マフラは私が開設に助力した最初のスクールセンターでした。これは地元の政治家がこの併合プロセスを率いる責任を担った良い例で、このようにして、教育に対して重要な貢献を果たしたのです。

テキストスライド：マフラは、リスボンの北西にある人口約 70,000 人の地方自治体で、学校の統廃合において先頭に立ってきた地域の一つ。マフラ市の 17 の地区は、住民数百人の農村から、広がりつつある市街地開発区域まで、様々である。

テキストスライド：マフラ市長の **Jose Maria Ministro dos Santos** は学校の近代化プロセスの先駆者となり、村の学校を閉校し、新たに市の中心部に位置する施設を開設した。

**JOSE MARIA MINISTRO DOS SANTOS**、マフラ市長：この公園は面積が 27 ヘクタールあり、かつては広い農地だったのですが、市が買上げました。私たちは、ここにスポーツ用エリアを建設して、生徒数約 4,000 人の 2 校のカリキュラムを補うことを決定しました。

スポーツパークには、子どもたちの運動能力の発達に必要なものがすべてそろっています。サッカー場、陸上競技場、テニスコート、体育館、水泳プール。学校と一般の子どもたちがこのスペースを集中的に利用します。私共の学校には、それぞれ、図書館、コンピュータ室、カフェテリア、それから、もちろん教室もあり、教育プロセスの基本が備えられています。さらに、保護者用の部屋もあり、校内で会合を開くスペースが用意されています。教員研修用の部屋もあります。地域社会全体がこの建物を共同で利用すべきです。しかし、これは容易ではありませんでした。最初の部分、つまり建物の建設が終わると、次はそれを有効に利用しなければなりませんでした。それはどうやってするか？保護者に語りかけることによってです。ポルトガルにかつてあった概念では、そして一部の地域には今でもそれが残っていますが、村ごとに学校が必要とされていました。学校、教会、墓地、その他様々なものが必要なのです。私が実行しようとしていたことはその正反対で、こうした学校をすべて中央に集めてクラスターにすることでした。それがいかに劇的なことだったか、想像してみてください。こうした村々の活気そのものでもあった子どもたちを取り上げて、こうした教育センターへ入れたのですから。

**MARIA DE JESUS GERALDES PIRES**、マフラ・スクールクラスター校長：それは容易なことではありませんでした。考えてみると、村の学校が人々にとって密接な状況から始まっていたのです。学校はすぐ近くにありました。教師は、こうした小さな村々で重要人物でした。そして、日常業務はすべて教師が行っていました。ドアを開けるのも閉めるのも、学校を開けるのも閉めるのも、電話に出るのも、すべて教師でした。この親密さ、この中心人物、教師と地域とのこの感情的なつながりを、私たちは失ったのです。

**JOSE MARIA MINISTRO DOS SANTOS**：良い反応をしなかった地域がありました。そのとき、私は何をしましたでしょうか？学校は準備ができていました。そこで、次のステップは、最も問題のある地域から保護者たちを呼ぶことでした。そして私と一緒に学校を見学しようと誘ったのです。カフェテリアで食事をしたり、コンピュータ室に座ったり、それから図書館を見て、体育館を見て、午前いっぱい学校で過ごします。その後で、こう尋ねるのです。「お子さんたちは、遊び友だちもいないような孤立した村にいるより、ここにいるほうがいいとは思いませんか？」「確かにその通りだ、ここのほうがいい」、保護者たちはそう言うでしょう。

**MARIA FILOMENA OUTEIRO**、マフラ・スクールクラスター教師：「さあ、皆さん、今日は何をしましょう？昨日は何をしましたか？何の映画ですか？何の映画？だれの話でしたか？何の家族？」

生徒たち：「動物。」

MARIA FILOMENA OUTEIRO：この学校へ来る前には、もっと田舎の学校にいました。コンピュータ室はありませんでしたし、図書館もカフェテリアもありませんでしたし、教室は古くて壊れそうでした。それに、同僚たちと一緒にいられる環境で働くようになることにわくわくしていました。私たちは毎日一緒に座って、何でも一緒にして、何かアイデアがあれば、互いに共有します。

MARIA DE JESUS GERALDES PIRES：「この件については部門コーディネーターと話をしましょう。でも、4年生の算数の手引きについては、コーディネーターのほかに4年生の算数部門とも調整する必要がありますね。」

MARIA DE JESUS GERALDES PIRES：今ではこの組織は縦方向に機能しているため、情報交換が増えています。幼稚園の教師がその経験を小学校の教師に伝え、これがさらに、ある段階から次の段階へと続いていきます。「第一サイクル」、つまり小学校から、「第二サイクル」の教師へと、ある種の生徒たちの「引き継ぎ」があり、子どもが3、4歳のとき、保育園に入る頃から始まって、15歳でクラスターを離れるまで、続きます。

保護者：もちろん、新しい学校には長所があります。働く親にとっては、子どもたちが学校に遅くまで居られます。子どもたちは新しいことや、英語や、楽しい理科を学べますし、課外指導も受けられます。

生徒：違うことに気づいたよ。だって、前の学校では1年生に男の子が2人しかいなかったから。今はもっと大勢いる。ちょっと変だけどね。ほかの子たちも好き。1人は私の親友なの。

テキストスライド：PISA調査で、ポルトガルはOECD平均を下回る成績が続いている。しかし、その結果は全体的に向上してきた。

テキストスライド：PISA2009年調査で、ポルトガルの生徒は読解力で平均489点となり、2000年の470点から改善した。数学的リテラシーでは平均487点で、2003年の466点から改善、科学的リテラシーでは平均493点で、2006年の474点から改善した。

テキストスライド：家庭的背景が生徒の成績に与える影響は、今では以前ほどではない。異なる家庭的背景を持つ生徒の間の読解力におけるばらつきは、現在、OECD加盟国中最も小さい。

DAVID JUSTINO : 生徒たちは、学校を統合することによって、大きな恩恵を受けていると思います。それは、村の環境から離れることができるからです。同じ年頃の他の生徒たちと、うまく付き合うことができます。良い教育に必要なリソースがすべてそろっているのです。

JOSE MARIA MINISTRO DOS SANTOS : 私がここで育った頃と今との違いは比べようがありません。私が幼かった頃は、このあたりの野原を歩いて、半ズボン姿で遊んで、水のかけ合いをしたり、お巡りさんから逃げたりしていました。当時は厳しい時代でした。母は鉛筆を 1 本、普通の黒鉛筆を買ってくれました。それを半分に折っては、弟と二人で使いました。一人に鉛筆半分でした。鉛筆が短くなると、藁を探してそれにくっつけて、長い鉛筆にしました。そんな時代だったのです。そんな風にして、読み方を学びました。しかし、私の子どもたちや、今、私を頼りにしている子どもたちには、違う種類の成功や、違う種類の機会が与えられると信じています。そして子どもたちはそれに気づき、それを感じ、こうした機会についてわくわくします。こうした学校を卒業するこの世代の生徒たちがこの国を高める力となると、私は確信しています。